

体験学習を通した教育方法に関する一考察 ～イベント「大きくなーれ 友だちの輪」の教育効果～

鍋島恵美子 立川かおり 馬場由美子
吉村 浩美 福元 健志 小川 智子

(西九州大学短期大学部 生活福祉学科)

(平成 24 年 12 月 20 日受理)

Discussion on Teaching Method through Active Learning ～ Educational effectiveness of “Okikunare Tomodachi no Wa” ～

Emiko NABESHIMA Kaori TACHIKAWA Yumiko BABA
Hiromi YOSHIMURA Takeshi FUKUMOTO Tomoko OGAWA

(*Department of Living and Welfare, Nishikyushu University, Junir college*)

(Accepted December 20, 2012)

Abstract

The Department of Living and Welfare has organized an active learning program “Okikunare Tomodachi no Wa” since 2001. In order to develop our active learning program for further educational achievement, we will review educational effectiveness of this program.

This program aims to cultivate students’ planning and recreation ability by inviting disabled people. Since the 2002 program, all of students of the Department of Living and Welfare were to join the program. A number of participants exceed 250 which include high school students who are interested in care work. The second year students take leadership and communicate with the first year students to achieve a great success. We have collected their reports after the event and bound booklets. It has been revealed from the booklets that students attain various kinds of skills which are required for professional care workers such as communication skills, planning ability, leadership skills, and understanding of barrier.

Key word : Active Learning 体験学習

Understanding of the Disabled 障がい者の理解

Planning & Organising Ability 企画・運営力

Teamwork Skills チームワーク

Leadership Skills リーダーシップ

Educational Effectiveness 教育効果

体験学習を通じた教育方法に関する一考察

～イベント「大きくなーれ 友だちの輪」の教育効果～

I. はじめに

対人援助を専門職とする介護や福祉を学ぶ学生にとって、最も大切なのが「相手を理解する」ことである。しかし、まだ介護現場の体験や人生経験の浅い学生は、「相手を理解する」ということを、頭の中では理解できていても真に理解するということは困難である。授業で学んだ利用者理解や介護の方法、コミュニケーションのとり方等、授業内容をさらに深め、心に刻むためには、学生自身が直接障がい者の方と触れ合い、コミュニケーションを図ったり、職員の対応の仕方を目の当たりにして感動したり、衝撃を受けたり、心を揺り動かされることが必要であると考えます。

そこで、生活福祉学科では、体験学習の一環として平成13年度から平成23年度まで11回「大きくなーれ 友だちの輪」を開催した。このイベントは、介護や福祉に関心のある県内の高校生や小規模作業所の障がい者を招いて、生活福祉学科と専攻科保育福祉専攻の学生合わせて総勢300名～250名が一堂に体育館に集まり、学生の企画・運営によるレクリエーションやゲーム等で終日楽しく過ごしていただくというものである。イベントを終え見送る時には、障がい者の方々も学生の顔も笑顔や達成感に溢れている。その後イベントの振り返りとして、一人一人の学生が感想を「通信」としてまとめ冊子にしたが、通信からも企画から開催するまでの過程におけるチームワークの大切さ、企画の難しさ、リーダーシップのあり方、成功した時の喜び等、学生が多くのことを感じたり、学んだりしていることがうかがえる。

ここに11回のイベントを総括し、あらためてイベントのあり方や教育効果を検証して次のステップに繋げていきたい。

II. 実施内容

(1) イベント「大きくなーれ 友だちの輪」の目的

- 1) 体験学習をととして福祉の心や人間理解を育む。
- 2) 学生の主体的活動をととして企画力や運営力を身につける。
- 3) リーダーシップ能力を育成する。
- 4) チームワークの重要性を学ぶ。
- 5) 障がい者の対応の仕方を学ぶ。
- 6) 成し遂げた時の達成感を味わう。
- 7) 地域貢献活動の一環として位置づける。

表1 開催日時と場所

回	開催年月日	開催場所
第1回	平成13年9月29日(土)	第一学生ホール
2	平成14年10月19日(土)	体育館
3	平成15年10月18日(土)	体育館
4	平成16年10月16日(土)	体育館
5	平成17年10月15日(土)	体育館
6	平成18年10月7日(土)	体育館
7	平成19年10月6日(土)	体育館
8	平成20年10月11日(土)	体育館
9	平成21年10月10日(土)	体育館
10	平成22年10月16日(土)	体育館
11	平成23年11月19日(土)	体育館

(2) 開催日時と場所

1回目は有志の学生を中心に試行的に実施する。開催時間は10時から午後1時30分までとし、場所は第1学生ホールで行った。2回目からは、全学生がそれぞれ役割を決め、午前9時30分から受付、午前10時より午後3時まで実施、場所は本学の体育館で行った。

表2 参加者の状況

回	総数	施設・作業所		高校		学生数	教員数	その他
		参加数	人数	参加数	人数			
1	73	1	15	0	0	30	13	15
2	310	6	50	7	100	150	10	0
3	310	5	50	5	100	150	10	0
4	321	7	45	5	110	156	10	0
5	330	5	63	5	95	157	10	5
6	284	6	51	3	97	121	10	5
7	234	7	50	2	85	90	9	0
8	201	7	50	4	76	66	9	0
9	185	4	45	4	61	71	8	0
10	203	6	61	5	44	83	8	7
11	255	5	43	6	100	98	8	6
計	2706	59	523	46	868	1172	105	38

(3) 参加者の状況

第1回目は、参加希望の学生を募り、本学に近い身体障害者療護施設「長光園」のみに参加をお願いした。従って、参加人数等は少ない。

第2回目から第11回目までは、学科のイベントとして全学生を参加させ体育館で実施した。大きなイベントなどに参加する機会が少ない近くの小規模作業所や障がい者支援施設7～8か所に参加をお願いした。また、県内の高校生にも「介護の仕事や障がいのある方々を理解してほしい、介護に関心をもって欲しい」という思いからボランティアでの参加を呼びかけた。

参加施設・小規模作業所の実績は次のとおりである。

- ①みのり作業所(9回) ②スペシャルオリンピクス(8回)
- ③かささぎの里(7回) ④響(7回) ⑤めぐみ園(7回)
- ⑥ライフサポート(6回) ⑦レインボーハウス(5回)
- ⑧ワークスペースKAN(3回) ⑨長光園(2回)

⑩あさひ荘(2回) ⑪まごころ授産所(1回)

⑫そら(1回) ⑬さくら(1回)

以上のとおり参加した施設や小規模作業所は計13か所であった。回を重ねるごとに恒例となったこのイベントを「楽しみに待っている」という小規模作業所もあり、地域貢献の一助になっていることがうかがえた。その年によっては、他の行事と重なり参加出来なかったり、インフルエンザ流行等により突然の不参加もあった。参加高校は次のとおりである。

①佐賀北高校(7回) ②高志館高校(6回)

③牛津高校(5回) ④佐賀工業高校(4回)

⑤龍谷高校(3回) ⑥佐賀学園高校(3回)

⑦清和高校(3回) ⑧厳木高校(2回)

⑨鹿島実業高校(2回) ⑩北陵高校(2回)

⑪神埼清明高校(22回) ⑫佐賀東高校(1回)

⑬塩田工業高校(1回) ⑭佐賀商業高校(1回)

⑮神埼高校(1回) ⑯鳥栖工業高校(1回)

午後のアトラクションとして、第2回目から第9回目まで佐賀北高校に、第11回目、第12回目は高大連携を結んだ清和高校に吹奏楽部の演奏をお願いした。高校生の参加人数が多いのは、吹奏楽部の生徒約50名～60名を含んでいる。吹奏楽を除くイベントへの参加高校生は、一つの高校から2名～5名程度であった。これらの高校生はボランティア部や生徒会の参加者が多く、このイベントをきっかけに次年度に生活福祉学科へ入学した生徒も数名みられた。

本学の学生については、第1回、第2回は生活福祉学科の学生を中心に実施したが、第3回からは専攻科の学生も参加した。第6回目から学生数が減少しているのは、生活福祉学科の入学定員数を減らしたことと、介護に希望する高校生が減少し定員数に満たない現状があるからである。

表-2のその他の欄の参加者は、第1回の15名については、地域の演奏ボランティアの方々、第5～6回はエルダーカレッジ生、第10～11回はあすなろう体験の授業を履修している西九州大学健康栄養学科、子ども学部、西九州大学短期大学部の食物栄養学科、幼児保育学科の学生が体験授業としての参加である。

(4)プログラム内容

第1回目

長光園の入所者代表の方に講演をお願いした。講演内容の一部を紹介すると「慰問に来られたご婦人の方々が、帰り際三十六歳の私の頭を撫でられた、我々は子どもではないのに失礼だ・・・という思いになった」「買い物するためスーパーの入り口で次に来る仲間を待っていたところ、見知らぬ方が何も言わずに私の乗っている車いすをスーパーの中まで押してくれた、その人はきっと私が困っていると思って押してくれたのだと思うが、私は

余計なお世話と思った、そういう時は一言声をかけてもらいたい」等、あらためて考えさせられるような話だった。その他、長光園で月に1回ボランティア活動をしている地域の音楽バンドの方々による器楽演奏や学生によるレクリエーション等で盛会裏に終了した。

第2回目～第11回目

教員の指導の下、「共に学ぶあすなろう」の授業時に、2年生をリーダーとして、実行委員、ゲーム、レクリエーション、ダンス、手話、昼食、高校生、小規模作業所、会場等の役割担当と担当毎に責任者を決め、学生主体でプログラム内容を企画立案し、授業の合間をぬって練習を行い、前日に準備とリハーサルを行った。それぞれの年でプログラムの具体的な内容等は異なるが、全体的なプログラムの流れは次のとおりである。

1) 開会セレモニー

色とりどりで学生が作成した花のアーチをくぐり、エレクトローン、高校生の吹奏楽部の演奏、本学科学生のバンド等のBGMの中、各小規模作業所や高校別にプラカードの先導で拍手の中入場。



写真 1

2) あいさつ

学長・学科長・実行委員長等の開会の言葉

3) 小規模作業所・施設・高校毎に自己紹介の後、参加者による出し物を披露

高校生や小規模作業所の自己紹介の後、歌や踊り、演奏等が披露された。ここぞとばかり音楽に合わせ踊りま

くる小規模作業所の方々の笑顔と情熱に、参加者の皆が一緒になって踊り出し、会場は大盛り上がりで一体感に溢れた。



写真 2

4) 全員でするゲーム

綱引き、玉ころがし、玉入れ、関所やぶり等、参加者を楽しんでもらうよう毎年、学生が何度も検討を重ね企画する。チームごとに競争するので、する方も応援団も一生懸命であった。



写真 3

5) 全員でするダンス

学生が簡単で皆が楽しくなるようなダンスの振り付けを考え、参加者をリードできるように全員で何回もリハーサルを行う。当日は、体育館いっぱい手を取り合いながら楽しい一時を過ごした。



写真 4

6) 昼食とレクリエーション

グループ毎に教室や学生ホールに分かれ、そのグループの担当学生は事前に部屋の飾り付けやレクリエーション等の内容を企画し、学生も一緒に会食し、その後、簡単なレクリエーションを実施した。少人数なので和気あいあいとした雰囲気であった。学生は参加者のトイレ誘導等も行った。



写真 5

7) 高校生の吹奏楽演奏

体育館内に楽器を運び入れ、演奏は館内に響き渡り、衣装をまとして踊りながら演奏する高校生の姿は圧巻だった。



写真 6

8) 学生による手話

教員の指導の下、手話担当の学生が1曲～3曲を選び、感情豊かに表現できるよう、手の位置、下ろすタイミングが揃うまで練習を重ねた。当日は、学生全員が壇上に整列して、黒のTシャツを着用し、曲に合わせ一糸乱れぬ手話の光景は、とても美しく感動して涙ぐむ参加者も見られた。



写真 7

9) 全員でするフォークダンス

イベントも終盤になり、毎年曲目は違うが全員でフォークダンスを行った。担当学生が中心になり振り付けを指導、学生は振り付けが難しすぎたり、説明の難しさ等を体験から学んだようだ。しかし、たとえ振り付けがうまくいかなかったても、1日の思い出を胸に皆が手足を動かしながら笑顔で交わす表情には、全員が満ち足りた思いに溢れていた。



写真 8

10) 閉会セレモニー

閉会のあいさつの後、BGMと紙吹雪と拍手の中、「来年もまた会いましょう」と別れを惜しみながら花のアーチをくぐり退場。



写真 9

Ⅲ. 学生のアンケートより

アンケート実施日 平成 23 年 11 月 25 日・29 日

アンケート回答数

生活福祉学科 1 年生 39 名・2 年生 40 名

専攻科保育福祉専科生 13 名

計 92 名 (100%回収)

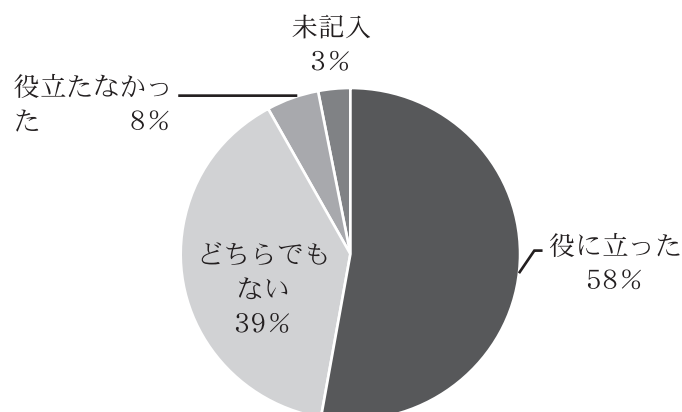
■アンケート内容と結果

1) 障がい者とのコミュニケーションについて

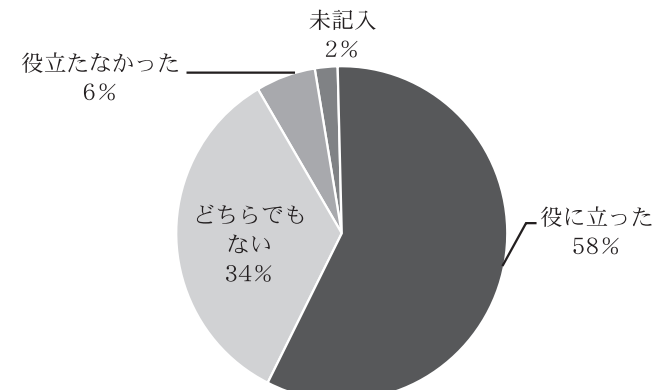
障がい者とのコミュニケーションが役に立ったかどうか、また、「役に立った」と答えた理由を問うたところ、1 年生は 53%、2 年生は 58%が「役に立った」と答えた。その理由としては「障がい者の理解が深まった」「職員の対応の仕方が学べた」「障がい者のリードの仕方がわかった」「相手の良いところを引き出して笑顔になっていただく大切さがわかった」「コミュニケーションの深さを知った」等であった。「役に立たなかった」と答えた学生は 1 年生 5%、2 年生 6%であり、その理由は「体調不良で当日参加できなかった」「記録や昼食、司会等、担当の任務で小規模作業所の方々とほとんど接することができなかった」等であった。障がい者とのコミュニケーションをとるために交代してゲーム等に参加するよう話し合ったが、「担当の任務に責任をもちたい」とする意見もあった。

図 1 障がい者とのコミュニケーション

障がい者とのコミュニケーションに役に立ったか(1 年生)



障がい者とのコミュニケーションに役に立ったか(2 年生)

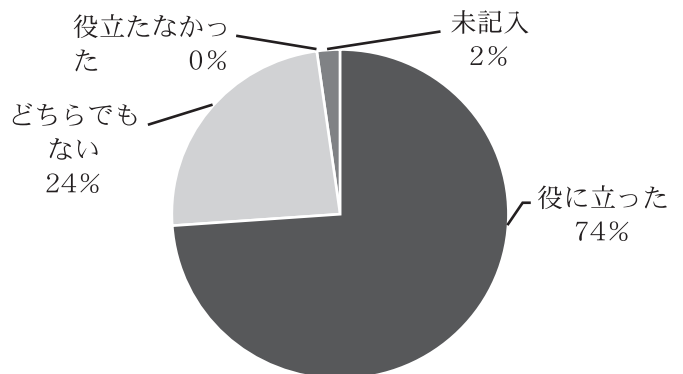


2) 学生同士のコミュニケーションについて

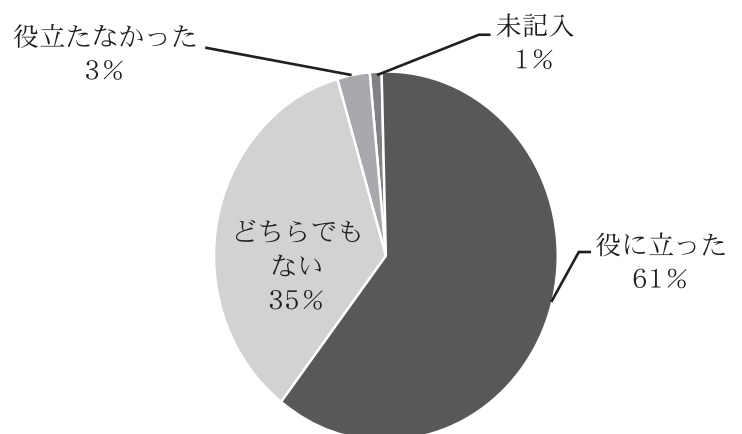
イベントを通して学生同士のコミュニケーションに役立ったかの問いについては、1 年生は 74%、2 年生は 61%が「役に立った」と答え、約 10%の差があった。役に立った理由としては「話したことのない人と話せた」「協力することの大切さや一体感を学んだ」等であった。1 年生は入学して半年余りであり、イベントを通して同級生や 2 年生と触れ合う機会となるため、学年で差が出たと思われる。「役に立たなかった」と答えた学生は 1 年生 0%、2 年生 3%であった。

図 2 学生同士のコミュニケーション

学生とのコミュニケーションに役に立ったか(1 年生)



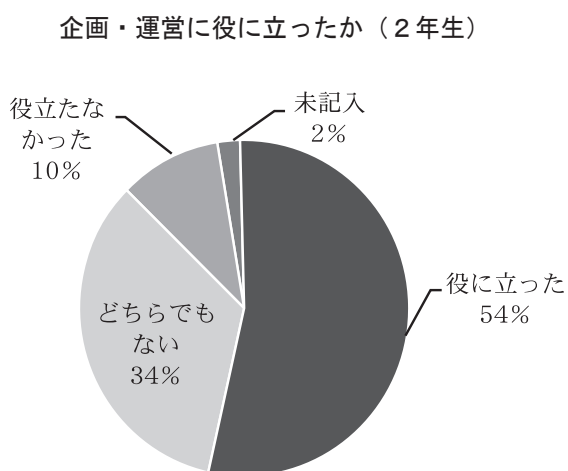
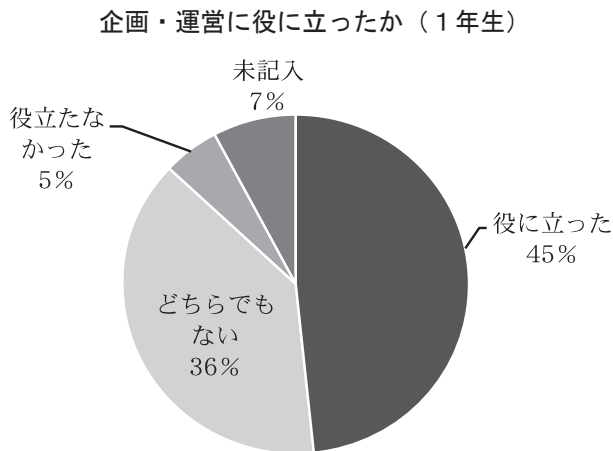
学生とのコミュニケーションに役に立ったか(2 年生)



3) 企画・運営について

「大きなーれ 友達の輪」の企画・運営を体験して役立ったかどうかの問いについては、1 年生 47%、2 年生 54%が「役に立った」と答えている。その理由として「行事を責任もって行うことの大切さ」「全体の把握の大切さ」「障がい者のことを考えて企画することの難しさ」「協調性」等々を学ぶことができたという意見があった。

図3 企画・運営



4)「大きくなーれ 友達の間」から学んだこと

このイベント全体を通して学んだことを問うたところ、一番多かった答えは「コミュニケーションの大切さ、楽しさ、方法の大切さ」等で、次が「協力の大切さ・仲間の大切さ・団結力」等、3番目が「企画・運営、計画性、予測の大切さ」、その他には「責任感、笑顔の大切さ、一人一人が主役であること」「大人としてのマナー」、また、「自分の価値観のちっぽけさを感じた」「自分が大きくなれた」等、自分自身を振り返ることができた意見もあった。

5)「大きくなーれ 友達の間」に対する意見や提案

意見として一番多かったのは「楽しかった、いいイベントだった、もっとあればいい、新鮮だった」等「良かった」という意見であり、学生が充実感、達成感を感じたことがうかがえた。次回への提案や問題点としては、「もっと早い時期から準備をしたい」「情報が分散しないように連絡担当を設け協力し合う」「小規模作業所の日ごろの様子を知ったり意見交換する機会も欲しい」等、建設的な意見があった。

IV.「通信」からみた体験学習の効果

生活福祉学科では、イベント後に参加者と学生に感想を書いてもらい、それを“通信”としてまとめ、学生や参加者に配布した。前述したようにこのイベントは学生が主体となって企画から運営、記録までの一連の作業を行う。これにより、介護福祉士に必要な基礎的な能力を身に付けることが期待されている。これまで発行してきた“通信”を通して、イベントの目的がある程度達成できたかどうかを検証したい。

通信に書かれている感想の多くは、学生が与えられた役目や責任についての振り返り、反省の内容で占められている。特に2年生は各グループ（例えばダンスやゲーム担当）が中心となって1年生を指導することから、それに対する感想が1年生のそれよりもはるかに多い。企画力や運営力、リーダーシップ能力、チームワーク、達成感等について、学生が学んだことや感じたことの感想を一部紹介する。

- ・全員でゲームの作成や実践に参加して、みんなが楽しめるゲームを考えることや運営することの難しさを感じた。しかし、いざ本番で実践しゲームに参加している人の笑顔を見てこの行事に参加できて本当に良かったなと思った。今後もこのイベントを通して大きな笑顔の輪が広がってほしいなと思った。
- ・クラス内の会場設営とレクリエーションを担当し、参加者との触れ合いを多くするためには、また、思い出に残る1日にするためにはどうすればいいか考えるのも楽しかった。
- ・今年は実行委員として前々からダンスを考えたり、後輩に教えたりと頑張った。その際、人に何かを教えよう伝えようとするのは難しく感じた。しかし、みんなと協力し合い本番は楽しく過ごすことができた。
- ・今年は主催側として準備や片付け等、様々な人の力が必要なことを実感した。
- ・昼食担当では段取りが悪く戸惑う事もあったが、来年は経験を活かしテキパキと準備をしたいと思う。
- ・本番当日までの準備が凄く大変であり、またその準備を含めた過程が大切だと感じた。
- ・去年の反省を活かし、より良いイベントになるようにいろいろな意見を出し合った。このイベントは企画・会場設営・進行など、すべて学生が中心になって成り立つので準備期間中はとてもあわただしく過ぎていくが、その分イベントが成功したときに大きな感動を得ることができる。皆で協力して一つのことを成し遂げることの大変さと大切さを学ぶことができた。
- ・皆で行うゲームの担当で本番では参加者全員が1つになり、ゲームを楽しんでいたのを見て、達成感と喜びでいっぱいだった。生福でしかできない貴重な経験が

できてよかった。

- ・忙しい担当の手伝いを進んでしてくれている学生が大勢いたのが嬉しかった。各担当皆の力でイベントを作り上げていくことの大切さを学んだ。
- ・本番には参加出来なかったが、手話の練習等を通して、皆で協力する大切さ、楽しさを改めて学んだ。
- ・ダンスや手話コーラスでは短期間の練習だったが、毎日昼休み、空き時間、放課後と少しでも時間を見つけては練習している姿を見て、自分も仲間に入りたいという気持ちが強くなった。
- ・個人の力は小さくとも皆で力を合わせれば大きなパワーになることを強く実感した一日だった。
- ・今回は頑張って成功させよう、1年生や小規模作業所の人たちに楽しさや感動を伝えようという気持ちになった。クラスの皆も一生懸命に準備や手話の指導などを行い、皆が一丸となり頑張れたと思う。

このように企画や運営に関する学生の声は毎回多く、それがいかに大変であったか、また、その経験を通じて得た達成感や充実感を強調している。そして、周りの学生と協力して企画を実行したり、高校生や障がいをもつ参加者が楽しめるように配慮したり、イベントを通じて学生がコミュニケーション能力やチームワーク能力を身につけていることもうかがえる。

次のような感想からは、障がい者への理解や福祉について再考する機会になったことがうかがえる。

- ・今回のイベントでは、様々な参加者のニーズに合わせることが必要であり、改めて「福祉」を考える機会になった。
- ・初めて障がい者と触れ合う場に参加した。障がい者の方とともに活動していく中で、不思議と「障がい者」という感覚が抜けていた。そして、自然な感じで一緒にゲームをしたり、ご飯を食べたり、踊ったりと楽しみながら接することができた。障がい者にとって、「難しい」、「できない」と判断するのではなく、声かけをし、一緒にやってみることで、自分の心の中にあった概念が変わってきた。
- ・フォークダンスでは、自分たちのグループ以外の方ともかわりを持つことができ、出会った頃の気持ちとは異なり、一つの壁を乗り越えて隣にいる感じがした。
- ・実習では味わうことができないつながりを発見できたのではないかなと思う。
- ・大きな一れ友達の輪には様々な感動の形があったと思うが、記録担当（写真撮影等）だからこそ見えてくる感動があったと私は思う。作業所の方々や、学生達の“生きた表情”を多く写真に収めることができ、そして、その表情に気づけたことを嬉しく思う。
- ・「大きな一れ 友達の輪」に参加してみて、小規模作業所の方の笑顔がすごく素敵だなと感じた。

- ・小規模作業所の方の出し物は、一生懸命されていてすごく感動した。
- ・小規模作業所の方々が披露された歌・踊り・ダンスの楽しさ、素晴らしさに、思わず立ち上がり手拍子をしてしまった。
- ・皆さんにわたくし自身が励まされ、手話の歌詞の“僕らはみんな生きている 生きているから歌うんだ”ほんとにそう思えた瞬間だった。
- ・小規模作業所の方たちはとっても明るくてパワフルで、私自身とても元気をいただいた。特に嬉しかったのが名前を聞かれて、頬をなでて下さったことで、私にそんな風に接して下さる人がいるという温かさや直に触れたような気がした。授業で障がいの種類や症状について勉強したりするけれど、手をつないだり、楽しく食事をするということは、障がいの有無にかかわらず、人としてとても温かくて、幸せなことだと思った。
- ・障害をもつ方々と一緒に歌ったり、踊ったり、食事をしたり時間を共有することで、心が温かくなり、気づけば終始笑顔だったと思う。

このように、実際に障がいをもつ人と接してみて、普段の学習からは学ぶことができない、多くのことを学習することができたということが分かる。学生にとって通常、障がいや福祉についての学びは机上が中心であり、介護実習では実習生の立場で実習に臨むため、広く障がい者や福祉を理解することは難しい。しかし、障がい者と一緒に楽しむことにより、別の視点から介護や福祉について学んでいることが感想から考察できる。

V. 結果と考察

11 回続いた生活福祉学科のイベント「大きな一れ 友達の輪」は、2年生と1年生の合同授業「共に学ぶあすなろう」の授業で話し合っって企画立案し、毎年2年生がリーダーになり本番に向け準備を重ねた。その途中では、意見の相違によって準備が順調に進まなかったり、時には学生同士仲たがいしたこともあったが、遅くまで話し合ったり強いリーダーシップにより、何とか本番に間に合うように責任者が統制をとってきたように思う。このような1年・2年の横断的な授業の利点は、2年生にとっては企画力や運営力、リーダーシップ能力を高めることができ、1年生にとっては、2年生の企画やプログラム内容、指導力等に対して、先輩を尊敬したり、見習おうと思ったり、疑問に思ったり、2年生から多くのことを学ぶことができたのではなかろうか。

この大規模なイベントを体験してみて、学生のアンケートや通信から「企画や運営することの難しさ、チームワークの大切さ」等が分かったという感想が多かった

が、参加者の笑顔や拍手、嬉しそうな表情からそれまでの苦勞が報われ、感動で涙したり、達成感や充実感を味わっている。イベントを成功させるために、何カ月も前から話し合い、計画を立て、何回もやり直すことで、学生同士の友情や、チームワークの大切さを感じ取ることができている。企画力や人を動かし役割を果たす責任感、本番に向けた段取り等、悩みつまずきながら準備を進めたからこそ、全体の流れの把握や進捗状況、報告・連絡の必要性等、実践する上で必要なことに気づき理解できたと思われる。学生の中には積極的に参加することができない学生もいて周りを困らせたりもしたが、2年生になると動けるようになり、このことがきっかけで卒業するまでにはずいぶん成長している学生も見られた。このようなプロセスが、介護福祉士を目指す学生にとって多くの学びとなっていると確信する。

また、これまであまり接したことがない障がい者と触れ合うことで、障がい者に対するイメージが変わったという感想もあったが、どこか特別視しがちな障がい者に対し、自分達と一緒にあることを感じたり、一生懸命に取り組まれる姿に感動したり、授業では得ることができない障がい者に対する理解ができたのではないかと考える。学生は職員の方々の障がい者に対する対応の仕方からも多くのことを学んでいる。アンケートから「障がい者とのコミュニケーションが役に立った」理由として「職員の対応の仕方を学べた」「障がい者のリードの仕方がわかった」と答えている。学生は、職員の障がい者への対応をよく観察し、障がい者との関わり方を参考にしていくことがうかがえる。このことは、通常の講義や演習では実感することは非常に難しい。

このイベント全体を通して、学生の生き生きした表情や意外な応用力やさまざまな能力を知ることもでき、これらは体験学習ならではのものであり、対人援助能力を伸ばすためには、今後もこのような体験学習を取り入れた教育が重要といえる。

さらに、このイベントに参加した小規模作業所の皆さんからは、帰り際「来年も参加したい」「今日は楽しかった。また次も来ますね。」と笑顔で口々に言って下さり、毎年楽しみにしている小規模作業所もある。このイベントは学生の学びだけではなく、地域貢献活動の一環としても根付いてきたように思う。

以上のことから11回実施したイベント「大きな一輪 友達の輪」の目的は、ほぼ達成したと言えるのではなかろうか。今後もこれらの体験学習を基に、学生が介護福祉士として実践力を身につけるためのイベントを教育に取り入れていきたい。

「大きな一輪 友達の輪」に参加していただいた施設や小規模作業所の皆さん、高校生に深く感謝いたします。